

---

# 東方維形録

そのまた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方維形録

### 【Nコード】

N6019Y

### 【作者名】

そのまた

### 【あらすじ】

テンプレっぽい転生物、そんなお話

## 1話 転生（前書き）

初投稿です、よろしくお願いいたします。

## 1話 転生

「…はあ!？」

目が覚めたら、自分は森の中にいた。

「ちょ、ちょっとこれどういうことだよ!!?」

なぜこんな場所にいるのかわからない、俺は確か…あれ？  
なんと、目が覚める前のことがまったく思い出せない。

これはまずい、どうしてこうなった!？

「おおおちつけ俺！まずはなぜこんな場所にいるのかを考えなくては!」

さて、なぜ自分はこのようなところにいるのだろうか？

何故か目が覚めたときから立っていたし、周りの木々が大きく見えるし…

とりあえず冷静になった俺は辺りを見回す、やっぱり木、下を見る、  
生い茂る草、

「…ふむ、何がなんだかまったくわからん」

とりあえず自分の体に異常がないかを見してみる。

なんだか小さい手、小さい足、服を着ている、そのぐらいだった。

…もしかして体が小さくなってる!？もうわけがわからんね!

そんなことを考えているといきなり頭痛がした。

『おい、聞こえるか?』

その後すぐに声が聞こえた、辺りを見回すが誰もいない。

『落ち着け、今からお前に話したいことがある』

話したいこと？というか、俺の頭に話しかけてくるこいつはいったい何なんだ？

『こいつとはなんだこいつとは、私は神だ』

心を読みやがった！？それより神様！？

『そう、神だ、今からお前がどうなったのかを話すから落ち着いて聞いてほしい』

どうやらこの神様は自分がどうなったのかを教えてくれるらしい、聞いてみることにしよう。

『お前は一度死んだ、そして妖怪に転生するはずだったのだが、こちらの方でミスがあつてな、間違えて人間に転生させてしまったのだ』

つまり俺は妖怪になるはずだったんだけど、間違えて人間にしてしまったということか。

しかし、なぜ森の中にいるのだろうか？

『本来ならそこで妖怪として転生するはずだったんだよ』

へえそうなのか、しかしなんで子供の姿なのだろうか。

『それがわからないのだ…、しかもお前はこの様子だと一部だけだ』

が、前世の記憶まで残っているようだしな』

わからないのかよ…、まあいいや、それよりいくつか質問していいか？

『別にいいぞ』

まず一つ目だ、妖怪とは何だ？

『妖怪とは人間の恐怖から生まれた生物だ、鬼や天狗などいろいろな種類がいる、長生きしている奴ほど妖力が多くて強い、そういう奴は大妖怪と呼ばれているな。』

なるほど、では二つ目、妖力とは？

『妖怪の力だ、妖怪達はそれを使って妖力弾を出したり、妖術を使ったりする。』

へえそうなのか、じゃあ妖怪になるはずだった俺にも妖力があつたりするとか？

『いや見てみたがまったく無いぞ？』

ですよねー

『その代わりにただの人間が持つにしては多すぎるくらいの霊力があるがな…』

おおうまた知らない言葉が、霊力？、何それすごいのか？

『人間が持っている力みたいなものだ、持っている量は人間によって違うが、修行をしたりして増やすことはできる。』

『霊力弾を出したり、霊力を使って体を強化したりすることができるぞ』

へえ、じゃあ俺にはそんな力がたくさんあるってことだな！

どうやって霊力弾とか出すのだろうか、後で試してみよう。

『他にも魔力に神力があるがお前にはあまり関係ないだろう、後は能力があるが…』

魔力も神力にも興味があるが、能力ってなんだ？

『能力は人間や妖怪が稀にもってる力だ、霊力などとは別だな』

へえ、能力を使ってどんなことができるんだ？

『〴〵程度の能力といって、能力によってそれぞれ違う効果を持っている、』

ちなみに私の能力は考えを司る程度の能力で、私の能力を使ってお前に直接私の考えていることを送っているのだ。』

へえそうなんですか、そんなことよりっ私にも能力とかあるんですかね！？

『口調が変わってるぞお前！お前に能力があるかどうかだが、あるみたいだな』

おおおっ！k t k r！で、どんな能力なんですか！？教えて神様！

『少し落ち着け…私はどんな能力なのかはわからない、ちなみにどんな能力なのかは突然ふつと頭に思い浮かんだり、目を瞑ったりして能力について考えていると文字が頭に思い浮かんでくるらしいぞ?』

そうなのか!よし早速目を瞑ってうおおお俺の能力は何ですかああああ!!

(形を操る程度の能力)(維持を操る程度の能力)この二つかああああ!

『ずいぶん早いな!?!』

ふふふ!ずいぶん早いということは俺はすごいということ!10秒もたたずに能力が思い浮かぶなんて、俺ったら天才だな!

『(うぜえ…)落ち着けといってるだろうが…』

うおおお俺はすごいぞー!特別だぞー!

『…少し黙れ!』

頭痛あい!

『…さて、先ほど話したが、お前は人間の子供となっている。それに、この森には人を食べる妖怪達がたくさんいる、油断していたら食べられてしまうぞ?』

妖怪って人食べるんですか!?!俺どうすればいいんですかね!?!



『お前にはかなりの量の霊力がある、それと能力がある、それらを使って妖怪たちを倒せ。』

…少し長くはなすぎたな、私は考えを送るのをを終了する、ここからは自分の力で生きていけ。』

あ、ちょっと待って！…あーいなくなってしまったか、

さて、この森の中にいる人間はおそらく俺一人だけ、戦い方とかまったくわからないのに、倒せ…か。

「やるしか、ないかあ…」

俺は一人でそう呟き、大きなため息をついたのであった。

## 2話 霊力

さて、いきなり森の中にいたり妖怪になるはずだったり能力とか持っていたりする俺だけどこれからどうするか悩んでます。

悩んだ結果、霊力とかいうのをどうやって使うのかいろいろと試してみることにした。

まず最初に霊力弾を撃ってみよう、手を前に突き出して…やあっ！

…やっぱりというべきか、何も出なかった。

さて二つ目の手段、能力とやらが目を瞑って考えていたら出たから、霊力も同じようにすれば出るんじゃないかね？っていうなんとも安直な考え。

とりあえず座禅を組んで、心を落ち着けて目を瞑って、体の中の霊力を探すような想像をする。

そうしていると真っ暗な空間に白っぽくもやもやとした物が浮かんでいる、これが霊力かな？

そのもやもやとした物を体の外に出すように…それっ！

…おおっ！すげえ、体の中からまるで力が出てくるようだ！

まるでその力が体中にまわりつくような感じがする。

この状態でなら霊力弾も撃てるんじゃないのか？

そう思いつつ、手を前に出して、この力を手に集めてそこから目の前にある木に向かって発射！

ボンッ

おおおおお！出た！出た出た！何か霊力っぽいものの塊が出てきた！そしてその塊は木にぶつかって「ドカアァン！」えっ？

…なんと、木の枝が全て跡形も無く消し飛びました。

強すぎたのかなあ？とりあえず同じ木に向かって同じようにして靈力弾を撃ってみる、

発射した靈力はさっきのよりかなり少なくなつたつもりだ。

そしてその靈力弾は木の幹にぶつかった、靈力弾は爆発して、木の幹には手のひらくらいの大きさの穴ができています。

…強いな、とりあえず体の周りの靈力を見ってみるが、あまり減っていないようだ。

神様が言つてたとおり、靈力を俺はたくさん持っているらしい。

しかし油断してはいけない、いくら力があつたって、使いこなせなければ意味は無いのだ。

さて、次は神様が言つていた方法、靈力で肉体を強化しよう。

といつてもどうすればいいかわからない、とりあえず、肉体に靈力を流し込んでみよう。

目を瞑つて、靈力を少しずつ体の隅々にいきわたらせていく、使つた靈力はさっき撃つた靈力より少し多いくらいだ、

そしていきわたらせた靈力をさっき靈力弾を発射したように…それっ！

おお！？なんだかさっきと比べて体が軽いぞ！？とりあえず全速力で走ってみると、

とてもこんな小さい子供が出せないような速度で走ることができた、うおー！すげー！！

そんなことをしていたらいきなり力が抜けて、速度が落ちていった。どうやら時間制限があるらしい、大体30秒ぐらいか…短いな。

次は能力を使つてみよう、まずは形を操る程度の能力のほうだ。

形を操るということは、物の形を変えたりできるのかな？横にある木に触つて、

形を変えてみることにする、とりあえず球体にしてみよう。

なんと、さっきまで普通の木の形をしていた木は、目の前で丸まったりくっついいたりしてあっという間に茶色と緑の大きな球ができましたとさ。

こりゃ面白い、しばらくいろんな形に変えたりして遊んでいました。

次は維持を操る程度の能力を使ってみよう、

…といってもこの能力はよくわからないのだ、維持することとか、維持させることができるのか？

何を維持させることができるのかまったくわからない、…そういや靈力で肉体を強化できたんだっとな、

その効果が消えないように維持することはできるのか？ちょっと試してみよう。

さっき使った量よりもっと多くの靈力を使って…うおうつ！？

ななななんと！体が軽いかさういうレベルじゃない！ありえないほどの速さで走ることもできるし、

木をおもいつきり殴ってみたらへし折れてこっちに倒れてきたけど、見てから回避する事だつてできた！

おっと能力を使うことを忘れてた、とりあえず頭の中で『肉体強化を維持する』と考える

そして俺は少し待つことにした。

数十分はたっただろうか、肉体強化が維持されているか試して見よう、とりあえず走ってみると、

さつきとまったく変わらない速度で走ることができた！同じように木を殴ったらへし折れたし、

見てから回避することもできた、どうやらしっかり維持されているらしい、他にもどんなのが維持できるのだろうか？

とりあえず変なポーズをして、そのポーズを維持してみた。

なんということでしょう、体を動かすことができません、これはまずい、『ポーズを維持するのをやめる』！

そうしたら体を動かせるようになった、ふうよかった、もしこんな状態で妖怪に襲われて食べられなんかしたら一生の恥だ。

そんなことを考えつつ、俺はいろいろなことを維持したりして実験することにした。

数時間後、いろいろなものを維持させることができるのがわかったたとえば速度、歩いている途中で速度を維持した結果、どんな体勢だろうが速度を保ったまま移動した。

ジャンプしたときに速度を保てば空を飛べるかもしれないが、降りるときどうすればいいかわからないので保留。

他にも形など、いろいろなものを維持できるが、説明すると長くなるので後にしよう。

…誰に説明するんだ？そんなことを考えながらそこら辺をぶらついている、

そうしていると何か見えてくる、そこに向かって歩くと、そこには大きな湖があった。

「おお…！」

その湖の水はとても綺麗で、魚が泳いでいるのが見えた。

俺はその水に引き寄せられるように湖に近づき、手で水を掬って飲んだ、おいしい、思わずそんな声を上げた。

俺は湖を覗き込む、そこに見えるのは真っ黒い髪をした子供、

…やっぱり、俺は子供になってしまったのか、俺はため息をついた、そうしていると後ろから気配を感じる、…妖怪だ、見た目こそ犬の形をしているが、

そいつから得体の知れない力が出ているを感じる、おそらく妖力というやつだろう。

「グオオ！」

「おっと危ない」

妖怪が牙をむき出しにしながら飛び掛ってきたので俺はそれを左に飛んで回避する、

そして妖怪の腹を思い切り蹴る、メキィといやな音が聞こえて妖怪は吹っ飛び、

その後ピクリとも動かなくなった。

「意外と弱かったな…」

正直言うと苦戦するかと思ってたのだが、予想以上に弱かった。

しかし、この妖怪が弱いだけで、他の妖怪たちはもっと強いかもしれない。

もしそんな妖怪と戦うことになったら苦戦するのは確実、最悪死ぬかもしれない。

「もっと強くなる、それが今の目標か…」

そう呟くと腹から音が鳴る、そういやこの森に生まれてから何も食ってないな。

食べれそうなものは…目の前にある妖怪達を見る、意外と食べれるのかもしれない。

そう思いつつ目の前にある妖怪の首を掴んで、空いた手で腹の毛皮を引きちぎる、…気持ち悪い、

肉をちぎって口の中に入れる、見た目は悪いが旨いな、そんなことを思いつつ食べ続けた。

残ったのは骨にくつついている肉と毛皮だけだ、とりあえず毛皮を

手と足を使つて伸ばして、その伸びた状態を能力で維持する、肉がある部分に右手をつけて肉の形を変えて剥ぎ取る。毛皮の肉をすべて剥ぎ取り終わつたら近くの木にぶら下げておく、次は骨の形を変えて食器みたいな形にしてみる、骨の皿と茶碗ができた。

そんなことをしていると眠たくなってきた、ここで寝てもいいが、寝ている間に妖怪に襲われるかもしれない、どうすればいいか考えた結果、近くの木にぶら下げておいた毛皮を下におろし、その木の形を変えて四角い箱にする、そしてその木の箱の周りにある木を三本ほどへし折り形を変え、四角い箱にくつつけた。

そして大きくなった木の箱の中を空洞にするようなイメージを頭に浮かべ、形を変える、するとどうでしょう、その木の箱はどんどん大きくなっていったではありませんか。

そしてその木の箱の外側に能力で穴を開けて中に入る、だが暗くて何がなんだかまったくわからない、能力を使つて壁に小さな穴をたくさん開ける、これで朝になればこの穴から日光が入る、

火をつかばこんなことをしなくてもいいのだが、明日試してみるか、そう思いつつ俺は入ってきたときの穴を塞いでその辺に寝転がり、毛皮を自分にかけた。

「おやすみなさい。」

そう言つて、俺は目を閉じた。

### 3話 妖力、後修行

「うう…ん」

目が覚めた、壁にあけた穴から日光が差し込んでくるからか部屋の中は少し明るい。

昨日は暗くて部屋の中がよく見えなかったが、朝になったらどうなっているのかがよくわかる、

部屋の中はただ広いだけの空間、あるのは毛皮と骨の食器だけ、

俺は壁に大きな穴を開けて外に出る、いい天気だ、湖に近づいて水を骨の茶碗で掬って飲む、ついでに顔も洗う、そして昨日殺した妖怪の肉を食べた。

俺は今湖から少し離れたところにいる、何をしているかというところ、  
霊力を使つて火を出す練習だ。

これができるようになれば肉を焼くことだってできるし、  
夜でも明るくすることができ、さあ目を瞑り集中して…ん？かなり近くに妖力を感じる、

こんな朝早くから妖怪が襲ってきたか？

と思ったがどうも違うらしい、一体なんだと思ったら…なんと、俺の体から出ていました。

「…はあ？」

神様ー俺には妖力無いんじゃないかな？と思ったんですけど、とりあえずなぜ俺の体から妖力が出ているのか考えてみた、



もしかして、あの妖怪を食ったのが原因か？そっぴゃ俺は妖怪になるはずだったんだよな。

じゃあ妖怪を食ったことで俺は妖怪になり始めた？と思って湖を覗き込んだが、そこに移るのは子供の顔、

手や足を見ても何の変化も無い、妖力だけを取り込んだのか？そういうことにしよう。

さて気を取り直して火を出す練習だ、手を前に出し手のひらを上に向けて、その上に火を浮かべるようにイメージする、

そして手のひらに霊力を集め、拡散させるように霊力を出してみる、「ポンッ」…出てきたのは霊力弾でした、しかも無駄に大きい。

めげずに何度もイメージや方法を変えたりして試してみたけど、出てくるのは霊力弾ばかり、

10回連続で失敗したところであることを思い出す、妖力が俺の体から出てきたことだ。

霊力でなかなかできないのなら、妖力でならもしかしたら楽に行けるんじゃないか？と考え、早速実行することにした。

だけど、俺は現時点では妖力は少ししか持っていない、少ししか使えないということを考えて使わなければ。

…そっぴゃ俺には維持する程度の能力という便利なものがあつたんだ、これを使って妖力の量を維持して、

減らさずに使うこととかできるのかもしれない、やってみるか。

まずは『妖力の量を維持する』、そして最初に霊力でやったように手のひらに妖力を集めて

拡散させるように妖力を出してみる、そうしてみると何となくだけど手に違和感を感じる、

だけど火は出なかった、こんどはやり方を変えて妖力と周りにある空気を混ぜるようにしてみる、

そしてそれをさっきと同じように拡散させるように妖力を出す、す

ると手の上に火が出てきたのだ！

「うっしやああああ！火がでたあああああ！」

思わずそんな叫び声がでてしまうくらい嬉しかった、俺は空いている手を火に近づけてみたが、あつたかくない、

手で触れてみてもまったく熱くない、失敗か？そんなことを思いつつ試しに足元にある草に妖力でできた火をくつつける、

その草はすぐに燃えた、そしてゆっくりと近くの草に燃え広がっていく、これはまずい！

俺はダッシュで家に戻り骨の食器を取ってきて、湖の水を掬い火にかけた、それを数回くりかえしてやっと消えた。

危ない危ない…

そういえば妖力は維持されているのか？確認してみたが普通に減っていた、どうやら維持できないものもあるらしい。とりあえず妖力の維持を解除しておく。

その後は数時間ほど霊力を増やそうと修行っぽいものをしてみた、瞑想してみたり、

座禅を組んでみたり、霊力を使っているいろいろなことをしてみたり…そんなことをしていると俺は新しい発見をした、まず霊力を掌に集めて一点に集中させて、

そしてそこから霊力を放出する。

するとそこから霊力の棒みたいなものが出てくる、なんとこの棒に触ることができるのだ。

その棒をもつて、思いっきり木に向かって振り下ろす、すると木がミシイとか音をだして倒れた、

その後すぐに棒は消えてしまった、どうやら使い捨てらしい。

俺は棒をまた作り、今度は消えないように能力を使い維持させた、そうしたら何度も木を叩いたりしても消えなくなった。

さらにこの棒は能力で形を変えたりすることができる、試しに刀み  
たいな形に変えて折れた木に振り下ろす、  
すると木が綺麗に真つ二つになった、…なんかかっこいいなこれ。

次は周りに霊力の結界を張って、一旦身体強化の維持を解除する、  
そしてその中で腕立て伏せや腹筋をする、

いわゆる筋トレだ、だけど子供の体だからなのか数回やったらすぐ  
に疲れてしまう。

そこで一旦休み、体力が回復したところで能力を使い体力を維持す  
る、そして筋トレをはじめた。

200回ほど連続で続けて少し疲れた、どうやら維持できるものと  
維持できないものの以外にも

完璧にはないが維持できるものがあるらしい、その後も続けてい  
て、1800回目あたりで続けるのがつらくなった。

体力の維持をやめて地面に寝転がる、もう夕方だ、そんなことを考  
えているとお腹が減ってくる、

一時間ほど体を休めて立ち上がり、霊力で身体強化した後妖力を隠  
してあたりをぶらつく、

なぜ隠すかという妖力を放出していると妖怪が襲ってこないから  
だ。

ぶらついていると妖怪が襲ってきたので、霊力弾を撃って一撃で仕  
留め、仕留めた妖怪の皮を剥ぎ取り、近くにある木の枝を折って地  
面に置く。

妖力を使って火をつけて妖怪の肉を焼く、…うん美味しい、生で食  
べるよりずっと美味しい。

食べたなら眠くなってきた、今日はもう寝ることにしよう。

自分の家に戻り、寝転がって自分に毛皮をかける。

明日は何をしようか、そんなことを考えながら俺は目を瞑った。

翌日、筋肉痛で一日中家の中に引きこもっていました。

#### 4話 名前

この森で生まれてから一年がたった、その一年の間に何をしていたかというと、

霊力を使った修行、妖力のコントロール、筋トレ、この三つがメインだ。

その結果、霊力は一年前の2倍ぐらいになり、妖力は10倍ぐらいになってかなり大きな炎を出せるようになり、身体強化が無くても細い木ならへし折ることができるようになった。

…まるで化け物だな、俺は。

ある夕方、俺はご飯を探しに森の中をぶらついてしていると前方に人影らしきものが見えた、

もしかしたら人間か？期待しながらその方向に走っていく。

そこにいたのは人の形をしてはいるが、赤い髪の毛に黄色の目、そして頭に角が生えている妖怪だった。

「ん？人間の子供か、こんなところで何をしている？」

おおう人の言葉をしゃべった、初めて見たぞこんな妖怪、面白そうだな。

「ちょっと妖怪を探していてね、見つけたら殺して食おうとも思ってるんだ」

あれ？何でこんなことをいったんだろうか、まあ確かにそうなんだけど。

「何？妖怪を殺す？ハハハ！面白いことを言う子供だな、陰陽師の

ようなやつならともかく、  
お前のような子供にできるはずがあるまい」

陰陽師？なんだそれ、すくなくとも平成とかにはそんなの無かった  
よな、確か。

「できるんだよなそれが、実際俺はこの森で1年間、妖怪を食って  
生きているしね」

「ククク…そうかそうか、ならお前の目の前に妖怪がいるだろう？  
そいつを殺して食べばいい、  
ただし…そいつはお前を殺そうとしているけどなあ！」

そう言った後妖怪は俺に向かって殴りかかってくる、…好戦的だな  
あ。

俺はそれを回避して妖怪の横っ腹に向けて足で思いっきり蹴る。妖  
怪はとっさに腕でガードそれを防いだ。

「グッ…なるほど、どうやら妖怪を殺して食っているという言葉は  
嘘ではなかったようだな。  
とんでもない力だ、こんな蹴りを食らって生きている妖怪などそう  
いないだろう」

「ふん、その蹴りを耐えておいてよく言うよ」

身体強化をしている状態で蹴ったのだ、  
この一撃で終わりにする予定だったのだがまさか耐えるとは、とん  
でもない化け物だな。

「オラァ！」

そんなことを考えていると妖怪が顔面に向けて突きを出してくる。

「おおつと危ない…痛っ」

どうやら回避しきれなかったらしい、頬に何か暖かいものが流れていくのを感じる。

それを好機とみたか、妖怪が右、左と一気に腕を突き出してくる。

「そらそらそらそらあ！」

俺はそれを全て回避して左手で妖怪の腕を掴み、地面に向かって思い切り叩きつける。

「グアア！」

「一気にいくぜ！」

俺は空いている右手で背中を殴り、その次には左手を離して足で蹴飛ばす、

妖怪は叫び声を上げながら飛んでいくが俺の攻撃はまだ終了していない、

俺は全力で地面を蹴って飛び、飛んでいった妖怪に追いつく、そして右手に靈力を込めて妖怪の腹に向けて正拳突きを決める。

妖怪はさっきの倍近いスピードで木をへし折りながら飛んで行った。

…やりすぎただろうか、生きているか心配しながら妖怪が飛んでいった方向へと走る、

飛ばされた妖怪は仰向けになってぶっ倒れていた、どうやら気絶しているらしい。

…あれだけやって気絶しているだけとは、こいつの体はどうなつてやがる。

とりあえずこいつを家に運び、毛皮で作った布団に寝かせてその上に毛皮をかけておく。

俺は寝転がって頬杖を付きながら妖怪が起きるのを待つことにした、  
…あれ？

頬の傷がなくなっている？俺はこの妖怪に頬に傷をつけられてから5分もたつてないぞ？

さすがに傷がこんなに早く完治するのはおかしい。

「うう…」

「お、目が覚めたようだな」

そんなことを考えていると妖怪が起き上がった、妖怪は辺りを見回している。

「…ここは？」

「俺の家だ、お前が気絶したから家に運んだんだよ」

「…なぜ殺さなかった？俺が人間と同じような姿をしているからか？」

「ん？妖怪を食うとはいったけど別にお前に向けて言った覚えはないぞ？

お前角があつてあんま美味しくなさそうだし、もっと美味しそうな妖怪もいたし」

そういつてやると妖怪は呆れたような顔でこっちを見た、というか



実際美味しくなさそうです。

「お前そんな理由で…まあいい、それより聞きたいことがあるんだが、なぜお前はそんなに強いんだ？」

「毎日腕立て伏せ1000回腹筋2000回ぐらやって、靈力を使った修行をして、妖力をコントロールできるように努力した結果だな。」

「…化け物が、一体どんな体をしていやる」

お前が言うな。

「そういえば聞いてないことがあった、お前の名前は何だ？」

名前？そういえばそんなものありましたね。いや1年間誰とも話さないとなんてすっかり忘れちまうのよ。

そうだ、こいつにつけてもらおう、自分でつけてもいいけど、妖怪につけてもらうのも面白い。

「名前…ないよ、俺には名前はないんだ、そうだ、お前が俺に名前をつけてくれないかな？」

「名前がない？それより、俺が名前をつけてもいいのか？」

「俺がつけてくれといってるんだからいいに決まってるだろう、酷すぎるのは却下するけど」

そういつてやると妖怪は顎に手を当てて目を閉じ、一人でぶつぶつ言い始めた。

そうしてしばらくたつとまた目を開け、口を開いた。

「そうだな…殴<sup>おうち</sup>碎、なんてどうだ？殴るに碎く、それで殴碎だ。」

殴碎…なんとも安直な名前だな、まあいいか。

「ああわかった、じゃあ俺の名前は殴碎だ。そういえば、お前の名前は何だ？」

「俺か？俺の名前は龍鬼だ」

「そうか、じゃあこれからお前のことを龍鬼と呼ばせてもらおう、龍鬼は俺のことを殴碎と呼んでくれ」

「ああ、わかったよ殴碎、…さて、俺は帰るとするか」

「ん、帰るのか、またな龍鬼、俺は大抵この湖の近くにいるから、たまに遊びに来てくれ」

「そうさせてもらうよ、じゃあな殴碎！」

そういうと龍鬼は走ってどこかに消えていってしまった、しかし面白い妖怪だ、あんな妖怪始めてみたよ。今度会うときが楽しみだ。さて、お外はもう真っ暗だ、寝ることにしますかね。

「おやすみなさい。」

俺はそういつて布団の中に潜りこみ、目を瞑った。

翌日、朝っぱらから龍鬼がやってきて勝負を挑んできた。

## 5話 十年

龍鬼とあってから十年がたった、俺の体は成長してすっかり大きくなってしまった。

ちなみにその十年間何をしていたかというと、

龍鬼と勝負したり、修行したり、龍鬼と勝負したり、龍鬼と雑談したり、龍鬼と勝負したりしていた。

そう、あの出来事で龍鬼と会ってからほぼ毎日のように龍鬼が勝負を挑んでくるのだ。

しかもこいつ、俺と戦うたびに強くなってるのである。

俺の攻撃を見切ってカウンターを入れようとしてきたり、妖力弾を使っ  
て俺の動きを制限してきたり…

ちなみに戦績は2543戦中2543勝0敗、全勝である。なぜ毎日のように戦うのか龍鬼に聞いてみると。

「ああ、ただの暇つぶしだ、お前も暇そうだしちょうどいいだろう？」

なんてふざけたことを抜かしやがりました。

まあ実際暇だし、龍鬼と戦うのは結構楽しいので文句は言っていない、龍鬼の目の前ではだが。

そうそう、俺の能力について新しいことがわかったのだ。

ある戦いで俺が龍鬼の妖力をこめた攻撃を耐え切れなくて、左手の骨を折ってしまったのだ。その後龍鬼にはカウンターを決めて気絶させて家に運んだ。

そして家に戻るとあることに気づいた、なんと、折れていたはずの左手が少し痛むが普通に動かせるようになったのだ。

そのことを龍鬼に話すと龍鬼は少し考えるようなそぶりを見せて、

ちよつと左手を貸してみろといつてきた。

龍鬼に左手を貸してみるとなんと龍鬼は俺の左手をひねってねじ切りやがったのです、

それはもう想像を絶する程の痛みが俺を襲って、俺は龍鬼に向かつてなぜこんなことをするのかと怒鳴ったのだ。

しかし龍鬼は返事をせずに驚いたような、そしてどこか納得したような表情で俺を見ていた、

思わず俺は右手で龍鬼に殴りかかろうとしたが自分の体の異変に気づく、左肩の部分が何かむず痒かったのだ、

俺は左肩を見ると、そこからとんでもないスピードで腕が再生していたのだ。そして数秒後腕は完治していた、あの時はほんと驚いたね。

俺は龍鬼に向かって聞いてみたら、龍鬼曰く

「おそらくお前の維持を操る程度の能力とやらが働いて、何か体の部位に関係あることを維持してるんだと思う」

という答えが返ってきた、なるほど、俺の能力が勝手に何かを維持しているのか？ふーむ、体に関係あるといういえば、五体満足、とかか？または原型とか。

原型を維持するのなら俺の体も成長しないはずだから、おそらく五体満足とかあたりだろう、うん。

その後龍鬼の顔を一発ぶん殴っておいた。わかりやすいが、口で説明してもよかつただろうが。

余談だが、龍鬼は俺のところに遊びに来るときに偶にお土産を持ってきてくれる、

例えば俺が大きくなったときには服を持ってきてくれたのだ、あの時は本当にありがたかった。少し裾が破れていたり、血が付いていたりしていたが。

他にもキノコとか、肉とか、野菜とかをもってきてくれた、持って

きた食料はみんな俺が調理して食べている。  
キノコは毒キノコで、野菜は腐っていたが。

しかも肉は人肉だったし、ちなみにとても美味しかったです、今度食ったら中毒になりそうなくらいに。

それから龍鬼が持つてきた肉は龍鬼が何と言おうと食わずに捨てることにした。

そんなこんなで十年たったある日の昼ごろ、龍鬼が突然こんなことを言ってきた。

「俺、この森を出ることにする」

「ん、そうか、じゃあいつてらっしゃい」

「…少しは理由くらい聞けよ」

「理由といってもなあ、どうせお前のことだし暇だからとかそういう理由だろう？」

俺と毎日戦う理由が「暇だから」なんていっちゃう奴である、どうせこんな毎日に飽きてきたのだろう。

「まあ実際そうなんだが、一応他にも理由はあるんだ」

「もっと強くなるとかか？それとも強い奴に会いに行くとかか？」

とりあえず旅に出るためにありそうな理由を適当に挙げてみる。

「…その両方だ」

おお当たった、しかしこの森を出るかあ、そんなこと考えたことも無かったな。

そういえばこの森の外はどうなっているのだろうか？…なんだろう、なんだか興味がわいてきたぞ。

龍鬼がいなくなったらまた暇になるだろうし、森の中でまた龍鬼のような妖怪と会える可能性は非常に低い、

そんなことをして森の中で一生くらししていくより、他の場所ですごしたほうが楽しいかもしれない。そう考えると俺もここを出て、いるんなどころを旅したりしたほうが面白いかもしれない。

「どうした？殴碎、なんだか顔がニヤついているぞ？」

「…決めた、俺もこの森を出ることにする」

「…いきなりだな、まあお前のことだ、どうせ森の外に興味でもわいたのだろう？」

「なぜばれたし、まあいいや、とりあえず俺は明日の朝、この森を出ることにする」

「そうか、俺は今日の夜あたりに出るつもりだ、…さて、出る前の準備もある、俺は帰らせてもらっぞ」

「わかった、じゃーな龍鬼、また会えたらいいな」

「クク、また会えたらいい、ではなくて、また会おう、だろう？…じゃあな、殴碎」

そういつて龍鬼は森の中に消えていった、…また会おう、か、人間の寿命は長く生きて百程度。

その短い間にまた会えるかねえ。まあいいや。さて、俺もこの森を  
出る準備でもしますかね。



## 6話 奈良時代？

「さて、今日でこの湖ともお別れか」

そう言つて俺は歩き始めた、背中には龍鬼が持ってきた服の一つを使つて作った大きなリュック、その中には木で作った水筒と弁当、それと骨の食器と毛皮が入っている。

とりあえず一直線に向かつて歩き続けていれば外に出るだろうと思つて俺は歩き続けた。

一時間ほど歩き続けていると整備されているような道路を見つけたのでそれに沿つて歩く、

歩き続けていると森の中から出ることができた、森を出てからもしばらくの間進んでいるとなにやら前のほうに複数の人影が見える、

……ん？なんだかこつちに向かつてきてないか？

とりあえず俺は人影があるところに歩いてみる、だんだん目で見えるようになつてくる。

その人達は刀や棍棒らしき物を持っていた、そいつらの一人が口をニヤつかせながらこつちいつてくる。

「よう、そこの兄ちゃん、ちょっとこつちきてくれねえかな？」

「……何だ？」

「まあいいからこつちこいよ、なにもしねえからさ」

そう言つてそいつらはゆっくりと近づいてくる、……いわゆる山賊

って奴らか。

俺はそいつらの一人に向かって一瞬で近づき、少し手加減して腹を殴る、殴られたそいつは少し吹っ飛んで倒れたまま動かない。

「な！？手前なにを「ふんっ！」しびゃっ！？」

何かを言おうとしている奴にアッパーカットを決める、そして棍棒を奪い取って他の奴らに頭に一発ずつぶち込む、そして一人だけを残しておいて、その一人の胸倉をつかんで上に持ち上げる。

「はい、来ましたよ？で、こんな旅人に何の御用でしょうか？」

「た、た、助けてくれ！俺はまだ死にたくない！お願いだ！金でも何でも渡すから！」

死にたくないとは失礼な、俺がこんなやつらを殺したとも思っているのか。全員気絶させたただけだというのに。

まあいいや、とりあえず金と、近くに村とかでもないか聞いてみよう。

「おお！このような私にお金をくださるというのですか！なんて優しい方々なのでしょう、では今もっているお金の一部と、持っている刀を一本いただくとしましょう」

「わ、わかった！渡すよ！だから離してくれ！」

「ああそうだ、この近くに村や町はありませんか？」

「こ、この道をずっとまっすぐ行くと平城京とかいう都があるんだ、

そこにはたくさん人がいたはずだ。な？もういいだろ？離してくれよ」

平城京？確か奈良時代の都だったかな、となると今は奈良時代といったところか？

とりあえず山賊を放して刀と鞘とそれなりの金額らしいお金をもらった。刀は片手に持って、お金はリュックの中に入れておく。

確かこの時代のお金って銅貨だったはずだが、まあ気にしないことにしよう。

山賊は渡すものを渡したら「この外道が！」とかほざいてどこかに走っていつてしまった。

とりあえず山賊が言っていたとおりにまっすぐ歩いていく、そうしているとか人がたくさんいるところについた、おそらく、ここが平城京だろう。

とりあえずそこらをぶらついてみることにする、…周りの人々の視線が痛いな。

まあ片手に刀を持ってぶらついている人なんてほとんどいないだろうし、仕方が無い。

「おい、そこのお前、そこで何をしている？」

なんだか偉そうな服装をしている人に話しかけられた。

「私は旅の者です。旅をしている途中で町は無いかとさ…じゃなくって人に尋ねてみたところ、

都があると聞き、ここまで歩いてきたのです」

「本当か？」

「本当ですとも」

「まあいい、あまり騒ぎになるようなことはするなよ」

「はい、わかりました」

そういうと偉そうな服装をしている人はさっさと立ち去っていった、感じ悪いなあ、そう思いつつ俺は近くにあった茶屋に入って金を渡して団子とお茶を頼む。

「…さて、これからどうするかね」

ここで一年位暮らしてみるか？でも住む場所が無い。

いや、家は都の近くにも自分で作ればいいじゃないか、というわけの一つ解決、次は金だ。

妖怪を食べて生きていけば別に問題は無いけど、それじゃあ森ですんでいたときと何にもかわりやあしない。というか妖怪以外のものをもっと食べたい。さすがに飽きた。

金を稼ぐには…そうだな、妖怪でも退治して、その報酬で金でも稼いでみるか？うん、そうしよう。そう考えて立ち上がるうとする  
と店の人に呼び止められる。

「お客さん、団子食べないんですか？」

とりあえず、食べてから行くとしようか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6019y/>

---

東方維形録

2011年12月1日19時50分発行